

の開大はみられず、Facial axis の変化も 1° に止まっていた。Ba-N-A および McNamara line-A が増加し、上顎前方牽引による A 点の前方成長促進効果と考えられた。

【まとめ】本症例は側方歯群が交換中のため、プレートタイプの可撤式装置では安定が難しいこと、また第一小白歯の萌出前であり通常の固定式タイプも使用できないことから、部分的な固定源でも使用可能な E・アーチ・フロンタルプル法を適用した。上顎前歯の唇側傾斜により被蓋改善に及ぼす歯系の変化は含まれるが、上顎の良好な前方成長促進効果が認められた。今後、思春期性成長発育の推移を見守りながら、なお慎重な咬合管理を続けていく予定である。

22) 当科における全身麻酔下歯科治療症例の臨床的統計 —平成18年度～平成20年度—

○鈴木 厚子, 小野寺海保, 北野 善太, 篠田 奈々
猪狩 道代, 加川千鶴世, 春山 博貴, 相澤 徳久
島村 和宏, 鈴木 康生
(奥羽大・歯・成長発育歯)

【緒言】小児、特に障害児や低年齢児では、家庭での口腔ケアが困難なこともあり、う蝕多発者も少なくない。小児患者のう蝕治療ならびに外科的処置への対応は、外来での治療を基本としながらも、種々の理由から全身麻酔下での処置を選択する場合がある。そこで今回、全身麻酔下歯科治療症例の実態を知る目的で調査を行ったので報告した。

【対象と方法】平成18年度から平成20年度までの3年間に、本学歯学部附属病院小児歯科を受診した患者のうち、全身麻酔下で歯科処置を行ったのべ223例を対象とし、診療録、入院記録、および麻酔記録をもとに、症例数、年齢、処置内容などについて調査した。

【結果】1. 全身麻酔下歯科処置症例数は、平成17年までの年平均40例に対し、平成18年度は55例(入院38例、日帰り17例)であった。平成19年度は85例(入院49例、日帰り36例)と大幅に増加した。日帰り症例の増加が著明で、平成20年度も同様の傾向であった。

2. 82%は紹介患者で、歯科からの紹介が76.7%

であった。

3. 年齢別症例数では、4～6歳児が最も多かった。処置内容では、入院・日帰り症例ともう蝕処置のみが最も多く、約6割を占めていた。日帰り症例では、入院に比べ外科的処置のみの割合が高い傾向にあった。

4. 平均う蝕処置歯数は、4歳未満の入院症例で12.4歯と最も多く、日帰り症例は9.9歯であった。また、外科的処置単独の場合は埋伏過剰歯抜歯術が90%を占め、う蝕処置との複合症例では、小帯切除(伸展)術が56%を占めていた。

5. 全身麻酔の選択理由については、患児の協力性と処置内容から全身麻酔を選択した者が最も多かった。

【考察】紹介患者が多かったことから、本学附属病院が地域の拠点病院として病診連携に寄与していることや、患児と保護者の負担軽減になる日帰り全身麻酔への取り組みが地域に浸透してきたことも症例数増加の要因と考えられた。処置内容については、低年齢児のう蝕処置症例が多いことから、小児う蝕患者の二極化がうかがわれ、早期治療とともに、予防に関する啓発活動をさらに進める必要性が示唆された。

【まとめ】平成18年度から20年度の症例数は徐々に増加傾向にあり、特に日帰り症例の割合が増加していた。全身麻酔下歯科治療は、外来での治療が困難な小児のう蝕治療や、外科的処置に対する患児への負担を軽減の面で有効な手段であり、今後も関係機関との連携を図り、地域や保護者の要望に答えていきたいと考えている。

23) ビタシェードガイドの信頼性について

○板倉 慧典, 釜田 朗, 中條 雅人, 中島 大誠,
清野 晃孝, 森川 公博, 齋藤 高弘
(奥羽大・歯・診療科学, 森川歯科クリニック)

【目的】ビタパンクラシカルシェードガイド(以下シェードガイド)は、臨床で頻用されているシェードガイドであり、多くの歯科医療現場で歯冠色の色調選択基準として用いられている。しかし、その製作工程は熟練した作業員が金型を使用した手作業によるものであり、シェードガイドが均一に製作されているかは不明である。そこで今